

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K03855

研究課題名（和文）消耗品収益モデルに関わる動態的メカニズムの解明

研究課題名（英文）Mechanisms for consumables business models

研究代表者

藤原 雅俊（FUJIWARA, Masatoshi）

一橋大学・大学院経営管理研究科・教授

研究者番号：20411019

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題においては、各種のビジネスモデルの中でも特に消耗品収益モデルの設計が引き起こす動態的なメカニズムを明らかにすることに焦点を定め、事務機器業界など多様な業界に関する定性的な分析を行なった。研究期間における一連の定性分析の成果として、消耗品による利益獲得を目指す企業と、それに対して非純正品による事業展開を狙う事業者、そしてユーザーという三者間の相互作用を通じた動態的なメカニズムを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの日本企業にとって利益率の向上は喫緊の重要課題となっている。その一つの有力策として消耗品収益モデルがしばしば推奨されるが、そのビジネスモデルを効果的に展開するには、その利点と欠点を深く理解しておくことが望ましい。その点において本研究結果から得られる示唆は、社会的な意義を伴う。と同時に、当該メカニズムの解明は従来のビジネスモデル研究領域における理論的理解を深めるという点において、学術的な意義も伴う。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I focused on clarifying the mechanisms caused by consumables business models, and conducted qualitative analyses on various industries including the office products industry. As a result of a series of qualitative analyses during the research period, I elucidated dynamic mechanisms through the interaction among three parties: companies aiming to increase their profits from consumables, business operators aiming to develop their businesses through selling non-genuine products, and users.

研究分野：経営戦略論

キーワード：経営戦略 ビジネスモデル イノベーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を始めた当初、日本企業の利益率向上が非常に重要な経営課題として指摘されており、学術界および産業界の双方においてビジネスモデルに対する関心が高まっていたという点が背景として挙げられる。しかしながら、その関心の高さに反して、ビジネスモデルの設計に関する実態と、それによって引き起こされる動的な影響メカニズムについては十分に明らかにならなかったとは言えず、未解明な部分が多かった。こうした背景に基づいて本研究では、ビジネスモデルの中でも特に注目されることの多い消耗品収益モデルに焦点を定めて調査対象とし、業界横断的な長期比較分析を定性的に行なうこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、消耗品収益モデルが引き起こす動的なメカニズムを明らかにすることである。企業はそれぞれの戦略的意図に基づいてビジネスモデルを設計し、自社の利益獲得を目指す。そのひとつが、消耗品による利益獲得を狙う消耗品収益モデルである。このモデルが効果的に展開している業界がある一方で、いくつかの業界では非純正の消耗品が市場の中でかなり浸透してしまい、純正品を扱う企業の戦略的意図を挫いている。この現象が示唆することは、純正品収益モデルの設計が、多様な行為主体の意図や行為に影響を与え、それぞれに異なる動的なメカニズムを引き起こすということである。つまり、より効果的な消耗品収益モデルを展開するには、その後に引き起こされるであろう動的メカニズムをも念頭において、その設計を進める必要がある。こうしたことから本研究では、消耗品収益モデルが一体どのような動的メカニズムを引き起こすのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題を進めるにあたって採用した研究方法は、各種の二次資料および文献の調査、聞き取り調査、観察調査を通じた定性分析である。これらの定性的な分析アプローチを採用したのは、大きく2つの理由に基づいている。

第一に、企業が設計した消耗品収益モデルに対して、ユーザーや非純正品業者がどのような意図をもってどのような反応行動を見せるのかを把握するには、各行為主体に深くアプローチする必要があり、まずは聞き取り調査が方法として望ましいと考えられるためである。と同時に、その実態解明をより適切に行なうには、市場に関する現場調査観察が重要な意味を持つと考えられた。

第二に、動的なメカニズムを詳細に明らかにするには、各行為主体の相互作用を丹念に明らかにすることが望ましく、そのためにもやはり聞き取り調査および現場観察調査が重要な意味を持つと考えられるからである。ただし、事後的な振り返りを求める聞き取り調査に関してはバイアスを伴う恐れがあるため、過去の動向を確認するために各種の二次資料および文献を調査することによって、バイアスに伴う分析の歪みを補正することとした。

4. 研究成果

本研究課題実施期間における研究成果は、各年度における報告書の中で提出した通りであり、その概要は年度ごとに以下の通りとなる。

2016年度においては、まずは消耗品収益モデルの実態を明らかにするという目的のもと、各種製品の本体と消耗品に関する情報データベースの構築に力を注ぎ、成果を得た。具体的には、インクジェットプリンタ、レーザープリンタ、シェーバー、家庭用浄水器の製品を取り上げ、それらの本体と消耗品に関する情報データベースを構築した。シェーバーは、消耗品収益モデルを象徴する伝統的な製品であり、各種プリンタ製品は今日における消耗品収益モデルを代表する製品である。家庭用浄水器は、シェーバーやプリンタの分析から得られる知見を検証する対象事例として位置付けている。このデータベース構築から得られた興味深い知見として、インクジェットプリンタにおいては、本体にビッグタンクを取り付けておくタイプの製品が市場に投入されているということが明らかとなった。つまり、我々が一般にイメージするような、本体価格をできる限り引き下げて製品の普及を狙うとともにインクカートリッジで収益を上げるという仕組みだけでなく、カートリッジによる収入を期待しない仕組みについても併せて展開され始めているのである。これは、非純正品の普及に対する純正メーカー側の対抗措置として解釈することができる興味深い発見事実である。このデータベース構築を通じて、他の製品には見られない独自の対抗措置がインクジェットプリンタ市場において一体どのようにして生み出されてきたのかという次年度以降に向けた問いを導出することができた。

2017年度においては、インクジェットプリンタ業界における消耗品収益モデルの転換プロセスについて調査を行なうとともに、シェーバーやレーザープリンタ、逆浸透膜といった他の製品に関する製品情報及び消耗品情報の整理を進め、成果を得た。このうち、特にインクジェットプリンタについては、本体モデルの切り替えスピードが早まる一方で消耗品が複数のモデル横断的に活用されてきた背景があることから、消耗品のサイクルモデルが本体を逆転する現象がど

ここまで確認できるのかを検証すべく、データ整備作業を進めた。カートリッジモデルに限定して記せば、やはり、そうした消耗品と本体のライフサイクルの逆転現象が一部において生じていた。さらに、そもそもそうしたカートリッジモデルからの転換が業界で進行しているように感じられたことは、同年度の成果として得られた。かつて主流であったカートリッジ販売モデルからビッグタンクモデルへの転換が進みつつあるのである。消耗品収益モデルへの傾斜が多く日本の企業で必要とされると言われる一方で、インクジェットプリンタについてはその逆方向への動きが見受けられるという非常に興味深い知見が得られた。

2018年度においては、大きく2つの点について研究成果が得られた。まず第一に、東南アジア各国におけるインクジェットプリンタ市場の現地実地調査を行ない、消耗品収益モデルの史的展開の最新状況に関する実態解明を行なうことができた。各国市場では大型ITモールが多く店舗を抱えているため、それらの店舗における取材を進めながら、非純正品のカートリッジの普及状況について情報収集を行なった結果として、純正プリンタ各社がビッグタンクモデルを展開するにしたがって、多くの非純正品プレイヤーがその存在感を弱めるか姿を消すという状況にあることが確認された。消費者としても、故障のリスクやランニングコストの低さから、純正インクを用いたビッグタンクモデルを好んで購入する傾向にあることが確認された。こうした成果の一部については、当該年度における組織学会にて報告し、研究成果の整理を行なった。続いて第二に、水処理を担う逆浸透膜に関するイノベーションの長期メカニズムに関する研究成果を発信すべく、書籍の執筆を進めることができた。

2019年度においては、1)インクジェットプリンタ業界における消耗品ビジネスモデルの動態的变化に関する市場調査の継続実施、2)他業界におけるビジネスモデルの動態的展開に関する探索的調査およびその学会発表、3)研究書籍の出版、という3点で成果が得られた。第一のインクジェットプリンタ業界における市場調査に関しては、プリンタ本体と消耗品カートリッジの価格調査を継続して行ない、データベースの構築・更新を行なった。同時に、近年市場で普及しつつあるビッグタンクモデルに関する調査も進め、その販売動向を確認した。第二の他業界に関する探索的調査に関しては、ソフトウェア業界においてアジャイル開発を推進する企業への調査を進め、開発スタイルの変化がビジネスモデルの変革を伴うことを確認した。その上で、アジャイル開発の姿やビジネスモデル転換の難しさなどについて世界的な研究大会であるSASE(SOCIETY FOR THE ADVANCEMENT OF SOCIO-ECONOMICS)において研究発表を行ない、学会参加研究者から貴重なフィードバックを得た。他にも新興AI企業への取材調査も行ない、ビジネスモデル研究の対象業界を拡大させるための活動を進めた。第三の書籍の出版については、藤原雅俊・青島矢一(2019)『イノベーションの長期メカニズム:逆浸透膜の技術開発史』を東洋経済新報社から出版した。当該書籍は第60回エコノミスト賞を受賞することができ、その研究成果について高い評価を得ることができた。

2020年度においては、コロナ禍において実地調査ができなかったものの、雑誌記事や新聞記事の広範な調査を進めることができたとともに、オンラインでの聞き取り調査を通じて幅広く情報収集を行なうことができた。

2021年度においては、主に以下の3点に関する研究を実施することができた。1)事例調査の実施:できる限り多様な企業からの学びを進め、収益モデルに関する様々な考え方や変遷をたどるべく、老舗中堅企業である木村鋳造所の事業展開に関する事例調査を行なうとともに、新興企業であるSpiberの成長プロセスに関する事例調査を実施した。2)起業家の動向に関する調査の実施:収益モデル設計の重要性は新興企業にとって一層際立つものとなるであろうという見立てのもと、様々な起業家への取材を行ない、それぞれの起業背景や事業展開に関する知見を深めた。3)起業家動向に関する分析の実施:上で記したように、十分な経営資源に必ずしも恵まれるわけではない新興企業にとって、いち早い収益化は重要な経営課題となるはずである。そこで、起業家が一体どのような考え方でどのように事業を展開しようとしてきたのかを分析することにより、収益モデルのダイナミクスに関する知見を深めることができると考え、これまで実施してきた取材内容を振り返り、その特徴に関する分析を行なうことができた。

2022年度においては、複数企業に対する聞き取り調査を重ね、成果を得ることができた。聞き取り調査においては、企業規模や企業年齢によって調査結果に偏りが出ないように、新興企業および伝統的な大企業というように多様性を持った調査になるよう留意した。新興企業のビジネスモデル構築プロセスを理解するために実施した数社への聞き取り調査においては、航空宇宙関係、人材開発関係、コンテンツ関係、不動産関係というように多様な業界の起業家から協力を得て聞き取り調査を行ない、調査が特定業界に偏ることによって分析上のバイアスがかからないよう留意した。また、起業家への聞き取り調査と並行して、併せて、伝統的な大企業におけるビジネスモデル展開に関する聞き取り調査も実施することができた。

2023年度においては、まず第一に、ビジネスモデルの動態的展開に関する定性分析を進め、成果を得た。具体的には、新たな酸化ガリウムを用いたパワー半導体デバイスの開発を進める企業への取材調査を重ね、その成長過程に関する執筆を行ない、誌面にて発表した。調査の結果、

大学の知を活かしつつ、企業自らの独自施策や創意工夫を相乗的に重ねることによって、開発活動のみならず独自のビジネスモデル展開を遂げていることが明らかになった。と同時に、ビジネスモデルの創出と更新プロセスにおいて、経営者が果たす役割についても明らかとなった。続いて第二に、新たな分析対象事例を抽出すべく、幅広く探索活動を進めることができた。特に新たな取り組みを進める可能性の高い新興企業に注目し、創業の背景や創業後の事業展開、そしてビジネスモデルに至るまで多様な点に関する取材を実施し、誌面において発表した。

本研究期間は、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴う活動制約の影響を受けたため、全体として2016年度から2023年度までを要することとなったが、以上の記述から明らかなように、各種企業におけるイノベーション活動とその過程における消耗品などビジネスモデルの動的展開を扱った和書・洋書を刊行したり関連する事例を誌面発表したりすることができた。加えて、新たな事例探索活動の一環として行なった起業家への取材についても誌面発表することができた。研究期間中に刊行した和書については、幸いなことにエコノミスト賞を受賞することもでき、その成果を第三者機関にも認められるところとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 患志章夫, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 71
2. 論文標題 産業変革の起業家たち（第15回）勤怠管理を起点にしたクラウドサービスを通じて日本の労働生産性向上に寄与する	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 110-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉野英樹, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 71
2. 論文標題 産業変革の起業家たち（第16回）「火の次の発明」を人類に：核融合で実現する究極のエネルギー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 90-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 百合本安彦, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 71
2. 論文標題 産業変革の起業家たち（第17回）独立系ベンチャーキャピタルとして日本発のスタートアップを世界へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊, 青島矢一	4. 巻 71
2. 論文標題 FLOSFIA：型酸化ガリウム半導体のイノベーション	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 112-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤謙白, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 71
2. 論文標題 産業変革の起業家たち(第18回)職人からテック企業経営者へ: 建設DXで世界をめざす	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 110-119
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田和也, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 69
2. 論文標題 産業変革の起業家たち(第10回)後発グルメサイトの戦い方「食体験で人生をハッピーに」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 98,105
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 100
2. 論文標題 アフターサービスの戦略的意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40,41
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福井啓介, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 70
2. 論文標題 産業変革の起業家たち(第11回)大企業からシリアルアントレプレナーへ時代の変わり目を楽しみ尽くす	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 104,110
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 100
2. 論文標題 新事業創造を担う二つの定石	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40,41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 100
2. 論文標題 期待高まるスタートアップ企業	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40,41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋伸彰, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 70
2. 論文標題 産業変革の起業家たち (第12回) 社会を良くしたい人たちに必要な資金が回る仕組みをつくる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 112,119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星野佳路, 米倉誠一郎, 藤原雅俊	4. 巻 70
2. 論文標題 コンセプトを示し、優先順位を組み替えて、危機を突破する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 154,163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 100
2. 論文標題 グーグル、アップルに学ぶ「創発戦略」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40,41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 100
2. 論文標題 危機を突破する「戦略コンセプト」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 週刊エコノミスト	6. 最初と最後の頁 70,71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八坂哲雄, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 70
2. 論文標題 産業変革の起業家たち (第13回) 衛星打ち上げで終わらない宇宙開発への尽きない思い	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 106,113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 69
2. 論文標題 Spiber: 構造タンパク質素材で世界を変える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 120-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田陽介, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 69
2. 論文標題 AI でリアル産業の現場を革新する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 100-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高原幸一郎, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 69
2. 論文標題 モビリティを新たなインフラに誰もが自由に移動できる社会をめざす	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 92-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤毅, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 69
2. 論文標題 日本の大学から世界に通用するスタートアップを生み出す	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 140-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊, 青島矢一	4. 巻 69
2. 論文標題 日本の起業家群像: 「産業変革の起業家たち」 に基づく一次報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 8-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田和也, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 69
2. 論文標題 後発グルメサイトの戦い方「食体験で人生をハッピーに」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 98-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪山雄樹, 藤原雅俊, 若色謙二, 遠藤貴宏	4. 巻 68
2. 論文標題 永和システムマネジメント: アジャイル開発と開発者コミュニティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 126-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田博一, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 68
2. 論文標題 産業変革の起業家たち (第 3 回) 安全な大型リチウムイオン電池の開発と普及で環境問題・エネルギー問題の解決に挑む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 98-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小椋一宏, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 68
2. 論文標題 産業変革の起業家たち (第 4 回) デジタルネイティブな経営者が切望する「誰にでも最先端のテクノロジーを」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 116-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小里文宏, 藤原雅俊	4. 巻 68
2. 論文標題 産業変革の起業家たち (第 5 回) ナスダック上場を果たした日本人起業家が勤める「あとちょっとだけやり続ける」ことの意味	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 108-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 98
2. 論文標題 収益モデルの設計 敵の非純正業者に学んだプリンター業者の改善策	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エコノミスト	6. 最初と最後の頁 40-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福澤知浩, 青島矢一, 藤原雅俊	4. 巻 68
2. 論文標題 産業変革の起業家たち (第 6 回)「空飛ぶクルマ」でモビリティ革命に挑む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 134-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原雅俊	4. 巻 68
2. 論文標題 木村鋳造所: 事業承継と経営理念の刷新	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 176-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原潤一・青島矢一・藤原雅俊	4. 巻 67-3
2. 論文標題 産業変革の起業家たち：人工のタンパク質素材の用途開発と量産化で持続可能な社会をめざす	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 156-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 人羅俊実・青島矢一・藤原雅俊	4. 巻 67-4
2. 論文標題 産業変革の起業家たち：京大発ベンチャーが仕掛ける次世代半導体材料のイノベーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一橋ビジネスレビュー	6. 最初と最後の頁 110-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 酒井健, 坪山雄樹, 藤原雅俊
2. 発表標題 人間ドックの制度化：医師の伝道、技術革新、福利厚生との合流 1954-2023
3. 学会等名 経営史学会 東北ワークショップ
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Takahiro Endo, Masatoshi Fujiwara, Yuki Tsuboyama
2. 発表標題 Traveling Management Ideas, Lost and Gained in Translation: Agility in Japan
3. 学会等名 30th Anniversary SASE Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuki Tsuboyama, Manuel Nicklich, Stefan Sauer, Takahiro Endo, Masatoshi Fujiwara
2. 発表標題 Contextualizing agility? Comparison of structures and practices of agile pathways in Germany and Japan
3. 学会等名 The EGOS and Organization Studies Kyoto Workshop 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原雅俊
2. 発表標題 消耗品収益モデルの変容プロセス
3. 学会等名 組織学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Masatoshi Fujiwara, Yaichi Aoshima	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer Singapore	5. 総ページ数 372
3. 書名 Mechanisms for Long-Term Innovation: Technology and Business Development of Reverse Osmosis Membranes	

1. 著者名 Sabine Pfeiffer, Manuel Dicklich, and Stefan Sauer (eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 273
3. 書名 『The Agile Imperative: Teams, Organizations and Society under Reconstruction?』	

1. 著者名 藤原雅俊・青島矢一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 456
3. 書名 イノベーションの長期メカニズム：逆浸透膜の技術開発史	

1. 著者名 Little, Stephen E., Go, Frank M., Poon, Teresa Shuk-Ching (eds.)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 334
3. 書名 Global Innovation and Entrepreneurship: Challenges and Experiences from East and West	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------